

精神科医の思うこと⑱

「マスクはつらいなあ」

松村 奈奈子

コロナコロナの毎日。

20数年前、学生時代に授業で「パンデミック」の事は習っていましたが、何かそれは絵空事のイメージでした。もちろん教科書では、それは「いつ起こるかもしれない事」の様に書かれていましたが、でも私が生きている間には身近な所では起こらない事と、なんとなく思っていました。

それは私だけでなく、同僚や後輩医師も同じ感覚だった様で、コロナの話題になると「ほんと、こんな事が起こるなんてねー」とみんな口にして、その後ため息をつきます。ただ感染症専門の内科医の後輩だけは「いやあ、ちゃんと起こるんですよ」とニヤニヤと落ち着いて話します。なるほど、甘く考えてました。

そんなこんなで、突然の「マスク」生活がスタートして、もうずいぶん経ちました。

4月からの職場の新入スタッフなど、未だマスクをした顔しか見たことが無い人もいて、顔を覚えられません。声をかけられても「えっと、ごめんなさい、誰でしたっけ？」

と謝る事しきりです。人物の記憶、目元だけではなかなか厳しい。そんな毎日なんで、今回のテーマは「マスクはつらいなあ」

実は、過去に「マスク」診察を余儀なくされる時もありました。

十数年前に勤務していた総合病院には感染病棟があって、結核の患者さんの診察が時々ありました。長期入院で孤独でもあるので、眠れないとか不安などで、精神科を希望されます。そこでは、今回コロナで有名になった「N95 マスク」を付けて、2重のドアを開けて入院されているお部屋に診察に行きます。みな個室で入院されているので、シーンと静まり返った病棟の寒々しさは今でもよく覚えています。

ある時、海外で感染したという初老の男性から診察の希望がありました。症状は軽い不眠だけで、毎回「いやー、さみしくて先生待ってたよ」「病棟が静かすぎて」と何気ない会話を中心の診察でした。話し好きの男性で、海外の仕事の話などを楽しく聞かせてもらいました。ただ、「マスク」を通しての会話はもどかしいのか「伝わってるかなあ」「早くマスクなしで会話したいわ」とよく男性はこぼしていました。結核は治療薬もあり治る病気なので、ほどなくマスクを外して病棟から出れる事に。その日、男性は「今日はマスクないよー」と笑って私の診察室に入り、お互い初めてお顔拝見。一瞬見つめあって「こんな顔だったんですねー」と二人で大笑いしてしまいました。マスクで隠れた部分が、顔の印象を大きく左右するんだなあ意識した体験でした。もちろん、その日の診察での男性の話は、「マスク」をしている時よりずっと面白かったです。

そして今回のコロナ禍での精神科の診察。さすがに緊急事態宣言の期間は、電話での診察を中心にしていましたが、その後は患者さんに電話か対面での診察のどちらかを選択してもらう事になっています。ただ、電話は「マスク」以上に相手がよくわかりません。簡単に状態だけ聞いて、短い時間で終わってしまいます。私だけでなく、患者さんも会いたいと思ってくれたのか、今ではほとんどの患者さんが直接診察に来てくれています。

しかし、マスクをしての診察、なかなかしっくりきません。患者さんの顔を見て話をお聞きするのですが、口元がマスクで隠れていると「私、ちゃんと気持ちを汲めているのかな？」と不安になります。

そして、お笑いの好きな大阪生まれの私。診察では、自分も患者さんも笑顔になる会話が好きです。ボケたけど「ちゃんと笑ってくれてるのかな？」とじっと顔を見つめても、目元だけでは確信できなくて「笑えたかな？」なんて言葉にだして確認しちゃうことも。

また、話の内容によっては一緒に悲しんだり、怒ったりもします。声の抑揚で伝わる部分はあるのですが、私も「マスク」の中で笑ったり、困惑したりの表情をしているのですが「ちゃんと伝わっているのかしら？」と悩ましい日々です。

これまで「先生の笑顔を見ると安心するわ」とよく患者さんが言ってくれていました。もちろんお世辞もあるとは思いますが、笑顔は私の自慢です。ただし、目が細い弥生人タイプの顔なので目力弱く、「マスク」を着けて口元が見えないと、のっぺりで表情の変化は弱めです。あー、早く「マスク」をとって、笑顔をお見せしたい私です。